

特集

本が人と人をつなぐ



今まで、本を読んだことがない人はいないのでないでしょうか。赤ちゃんの頃、学生、大人になっても楽しめる本。読むことで、語彙力、読解力、集中力、想像力が身につく、認知機能低下の予防にもなるなど、その効果はさまざまです。新しい本は、どんな世の中に出てきて途切れることはありません。ですが、1990年代に急速に進んだといわれている「読書離れ」は今も続いています。



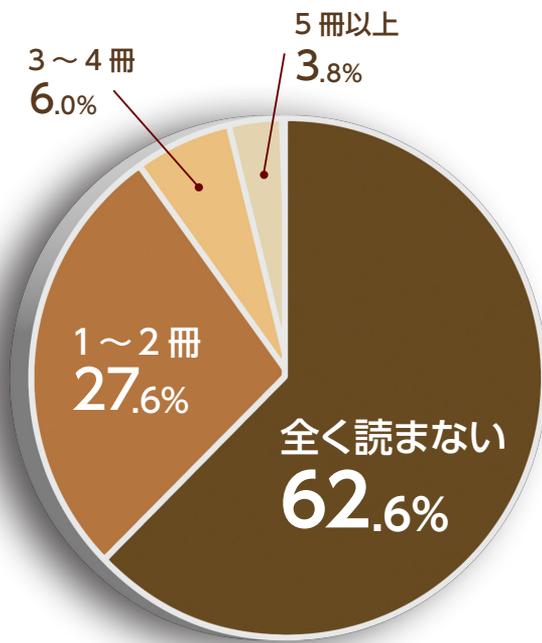
絵本の「ノンタン」や「ももんちゃん」など誰もが知っているような本。泣いている子どもをあやすために読んでいた方も多いと思います。最近では、スマートフォンやタブレットなどでYouTubeなどの動画を使うことも多々ある時代。SNS、ゲームなど、読書以外にも手軽に楽しめる娯楽があふれており、現代社会において時間をかけて1冊の本をじっくりと読むことは少なくなっているように思います。

本を読むと笑ったり泣いたり、日々の生活の知恵を得たり学びになったりすることがあります。自分とは違う価値観に触れたり、新しい考えに出会ったりすることで物事の見方が変わり、視野を広げることできます。今回の取材にあたり、本を大切にしている人たちとお話をしていくと、それだけではなく本は人と人をつないでいるということもわかってきました。

暑い夏が過ぎ、夜が長くなる秋。何かと忙しい今の時代だからこそ、活字の世界にゆつくりと没り読書の魅力を再発見してみませんか。

「読書離れ」が進む原因

科学技術の発展により、現代ではインターネットなどで情報をすぐに知ることができるようになりました。私たちの生活が便利になった反面、1冊の本を手にとってじっくりと読む機会が少なくなり、読書離れによる読解力、論理的思考力の低下などが問題視されています。



【図1】1か月に読む本の冊数

(文化庁「令和5年度国語に関する世論調査」より)

科学の発展による影響

科学技術が今ほど進歩する以前は、知りたいことがあれば本を読んで調べ、小説を読んで物語を楽しむなど、生活の中に「読書」が当たり前のよう存在していたのではないだろうか。

しかし、テレビやビデオ、1990年代にはインターネットが急速に普及し、現在ではスマートフォンなどで、どこでも楽しめる手軽なコンテンツ

に時間を費やすようになり、読書時間は年々減少しています。

文化庁が実施している直近の「令和5年度国語に関する世論調査」の結果では、1か月で本を「全く読まない」と答えた人は、全体の6割を超えています(図1)。前回調査から約15%も増加しており、全国的に読書離れが進んでいることが分かります。

本と本当に出会うタイミング

本はコミュニケーションツール

本を読むということは、文字から物事を想像して、自分の知らない世界に思いを巡らせたり、物事を深く知ることができ、好奇心を刺激する楽しい体験だと思います。登場人物に感情移入したり、物語に没頭することで、日常生活から離れて、気分転換ができる側面もあります。

本は、ひとりで楽しめるものですが、コミュニケーションの道具としても楽しめます。内容について家族や友達などと話し合ったり、読み聞かせでは親子のコミュニケーションツールになったりもします。

私の父は仕事で忙しく、夜も家にいないことがありました。



図書館館長

くどう まさこ
工藤 雅子 さん

本を好きになるとき

いるときには、寝る前に読み聞かせをしてくれました。ひとつ覚えていた本は『ロビンソン・クルーソー』。小学1年生の私にとっては、長編でひとりで読むのが難しい本でしたが、父は何ページか読むと、いいところで終わるんです。続きがすごく気になる読み方をしてくれました。これが、父との思い出として印象に残っていますし、少なからず私が図書館の仕事を選んだことにつながっていると思います。

今は電子書籍もたくさんありますが、速報性があり移動時間や隙間時間にサッと読めることは、読書の進化だと思っています。



読書をしない理由

読書量が減っている理由は、「スマートフォンやゲームなどで時間を取られる」、「仕事や勉強が忙しく時間がない」などの理由が多くを占めており、電子機器の普及やSNSの流行、現代社会の忙しさなど、私たちを取り巻く環境によって読書離れが加速していると考えられます(図2)。また、このほかでは、「魅力的な本が減っている」「良い本の選び方が分からない」などの回答があります。

砂川市でも読書離れ？

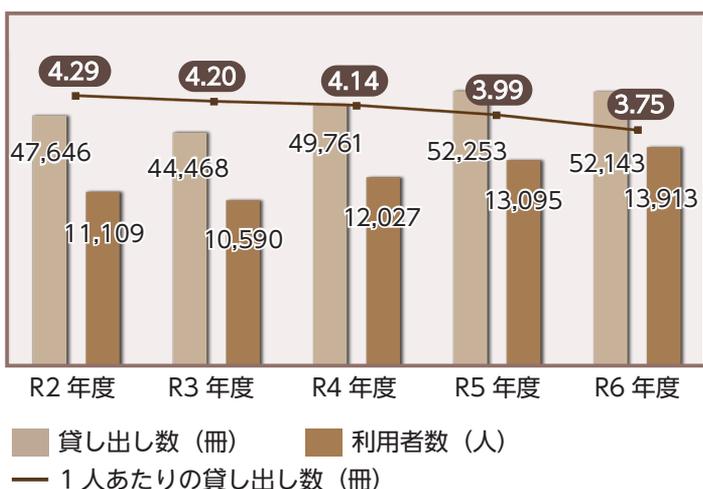
全国的に課題となっている読書離れは、砂川市でも進んでいるのでしょうか？

市の図書館利用状況を見てみると、令和2年度から6年度までの5年間で利用者数が増え、貸し出し数も若干の増加傾向がみられますが、1人あたりの貸し出し数が減少していることが分かります(図3)。電子書籍のみの本が増えている影響から、借りる冊数が減少している可能性もありますが、利用者が増えていることは、良い傾向にあるといえます。

【図2】読書量が減っている理由

(文化庁「令和5年度国語に関する世論調査」より)

1位	情報機器(携帯電話、スマートフォンなど)で時間を取られる
2位	仕事や勉強が忙しくて読む時間がない
3位	視力など健康上の理由
4位	テレビの方が魅力的
5位	読書の必要性を感じない

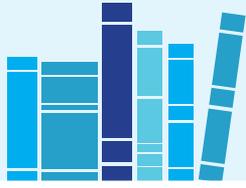
【図3】砂川市の図書館利用状況

1.2_毎月入ってくるたくさんの新刊。ザッと目を通して内容を確認し、登録作業などを行う

私は老眼で、読んでいると疲れてしまいますが(笑)。紙の本は手触りや匂いなどを好んだり、本屋さんや図書館などで本棚の間をブラブラしていると「こんな本があるんだ」と新しい出会いがあったりするので、自分の興味や世界を広げられることは、デジタルにない良さがあります。

読書は、語彙力がつくなど実生活にも役立ちますが、楽しさが無いと苦痛になってしまいます。習慣がない方は、紙、デジタルに限らず、まずは興味のあたる音楽、スポーツ、料理の本など身構えず気軽に。でも、一度手に取った本は、なにか自分の琴線に触れたということ。おもしろくなかったとしても棚にしまっただけ、1年後、3年後にまた挑戦するとスラスラ読めることでもあります。心境の変化、人との出会いの変化で本を好きになることもあるんです。ふだん読書をしていない方、時間がない方は無理に読もうとせずに、時々興味をもった本を手にとって、サッと読むくらいの適度な距離感を持って本と接してもらえればと思います。

図書館ってどんなところ？



図書館は情報の宝庫。でも、ただ本を借りるだけの場所ではありません。そこで働く人たちは、本が好きな人ばかり。皆さんにも好きになってほしいと、イベントなども行いながら、どの年代にも本の魅力を伝える工夫をしています。楽しみながら、お気に入りの1冊見つけてみませんか？

も誰も何も言わない、「場」としての魅力が図書館にありますよ。



図書館の魅力は？
ズバリ「本を借りなくてもくつろげる居場所」！
本を借りに来るのはもちろん、新聞や雑誌を見にフラフラと寄ってもよし。試験勉強や何かに集中して取り組みたい時、ひとりでボーっとしたい時、静かに落ち着ける場所としても使えます。ほかに家族で絵本や紙しばいを読んだり、友だちと本について一緒に選ぶのもいいし、飲み物を飲みながら涼んだりすることもできます。本という目的に関係なく、ずっといても誰も何も言わない、「場」としての魅力が図書館にありますよ。

無料 Wi-Fi /



子どもの本のコーナー



一般書のコーナーとは扉で仕切ることができ、読み聞かせをしても声が届きにくくなっているので安心！

「赤ちゃんのおはなしばたけ」や「おはなしのいずみ」のイベントでは読み聞かせなどを行っています。

新刊コーナー



週1回、4人の司書さんが選定した新しい本が入荷。年間2,000冊以上！

雑誌コーナー



最新の雑誌が読めます！

特設コーナー



時期によって変わる特設コーナーには、旅行、戦争、甘い本（お菓子や恋愛）などテーマに沿った小説や絵本などを置いています！

司書さんのオススメBOOK

『ヨシタケシンスケの絵本は、子どもから大人まで楽しめる絵本です。クスツと笑えるのに読み終えると、考えさせられる内容の本が多く、この『このあとどうしちやおう』は人の死について描かれています。
死んだおじいちゃんの部屋で「このあとどうしちやおう」ノートを見つけた男の子。死んだらどうなりたいか、どうして欲しいかをユニークに表現しています。男の子も同じように「このあとどうしちやおう」ノートを作り始めますが、死んだあとのことよりも、今、生きてるうちにやりたいことがいっぱいあることに気がつきます。
死について考えることも話すことも大事ですが、生きていくのも大事だと考えさせられる絵本です。

『ヨシタケシンスケの絵本は、子どもから大人まで楽しめる絵本です。クスツと笑えるのに読み終えると、考えさせられる内容の本が多く、この『このあとどうしちやおう』は人の死について描かれています。



司書 寺島美奈子 さん

図書館事業紹介



子ども手作り絵本教室

世界に1冊だけのオリジナル絵本を製作!



とよかん de ましごと体験

カウンター、本の整理などの図書館司書業務を体験!



大人のおはなし会

ボランティアの方が小説などの朗読を効果音などを付けながら披露!



本の福袋

大人向けと子ども向けがあって、どんな本が入っているかは借りてからのお楽しみ!

今までの貸し出し人気ランキング



『11匹のねことぶた』

馬場のぼる

児童書が1位!



『新参者』

東野圭吾

ドラマ化された推理小説ほかに、ガリレオシリーズも人気



『ポケモンをさがせ! ゆうえんちはおおさわぎ!』

相原和典

ほかのポケモンシリーズもランキング上位!



『1Q84』

村上春樹

書庫(2階)



図書館の2階と地下には、古い本を保管する書庫があります。ここから除籍するときには、「図書館リサイクル市」で毎年約3,000冊を無料配布しています(写真上↑)。

書庫には、一番古いもので昭和16年12月の新聞があります(写真下↓)。真珠湾攻撃の第一報が掲載されていて、酸化して紙がボロボロになっているのも相まって、歴史を感じさせられます。

書庫(地下)



司書 田中 さほ さん

続編の「月曜日は抹茶カフェ」のほか「赤と青のエスキース」「チョコレート・ピース」などもオススメ。最近では新刊が次々と出る。注目の作家のひとりです。

基本は短編小説なので一章ごとに少しずつ読むことができ、忙しい毎日の合間にもぴったりです。著者の他の作品も、日常の悩みや気づきをやさしく描いた物語が多く、読んだあとはほっこりとした気持ちになります。

舞台は小さなカフェ。そこに立ち寄る人たちの人間模様が温かく描かれた連作短編集という形が魅力です。主人公は章ごとに変わっていきませんが、前の物語に登場した人物がさりげなく姿を見せたり、または主人公になったりと、人と人のつながりがおもしろく描かれていきます。

『木曜日はココアを』
青山美智子

本を通して伝えたい——

読書から学べるもの、得られるものは数知れず。集中力や記憶力、想像力や道徳力がついたり、コミュニケーションを学べたり、そんな本の良さを伝えたいからたくさんの本を読んでほしい。読んだ分だけ、自分が成長する栄養になるはず。

学びにつながる朝読書



砂川中学校 教諭
ますの れん 蓮 さん

砂川中学校では、朝読書の時間を10分間設けています。テスト期間中などは勉強している子どもたちもいますが、基本的には毎日行っています。

朝読書は10年以上前から行っており、活字に触れる習慣を付けて思考力や読解力を育てる、心を落ち着かせて1日の学校生活を穏やかにスタートしてもらおうなどの目的があります。読む本のジャンルには特に決まりはありませんが、漫画以外の本で活字がメインのものに限定しています。小説を読んでいる生徒が多いですが、最近ではライノベルもはやっているようです。

集中して物語を味わったり、なんとなく字を眺めたりと、読書に対する姿勢は子どもたちによって

千差万別ですが、活字に親しむことで、国語への苦手意識を軽減することができているのではないかと思います。

もうひとつは、クラスメイトや先生とのコミュニケーションにも結びついていると感じています。「この漢字ってどうやって読むの?」「この言葉はどういう意味?」などと先生に質問したり、生徒同士で話している姿も見られ、朝読書が主体的、自発的な学びにも繋がっていると思います。



朝読書の時間で心を整える

砂川中学校3年 ^{にしかわ はるき} 西川 陽貴 さん

学校の朝読書の時間は、教室が静かで落ち着きます。この時間に本を読んでいると、だんだんと頭がさえてくるのを感じます。朝読書を続けるうちに、教科書の文章がスラスラと頭に入るようになったり、作文などが以前よりも書きやすくなったと感じています。

家でも毎日30分から1時間ほど本を読みます。アニメや漫画が原作の小説が特に好きで、夢中になって1日で1冊を読むこともあります。学校の図書室もよく利用するし、友達が読んでいる本に興味を持って借りることもあります。ふだんは手に取らないジャンルに出会えること、感想を話し合うのも読書の楽しさだと思います。



読書のきっかけを届けたい

読み聞かせボランティアの皆さん

私たちは、子どもたちを中心に絵本や紙芝居の読み聞かせなどを行っています。読み聞かせには、物語の世界に引き込んで本のおもしろさを知ってもらえたり、子どもたちとの掛け合いを楽しみながら、その場の一体感を感じられたり、たくさんの魅力があります。

幅広い年代の子どもがいる中で、最後まで飽きずに楽しんでもらうために、反応を見ながら抑揚をつけたり、感情を込めて読んだり工夫します。題材に選ぶ本は、SFや怪談、思わずクスッと笑えるものにすることもあります。読み聞かせが終わった後に「楽しかった」、「おもしろかった」と声を

かけられることが最高に嬉しいです、やりがいにつながっていますね。

最近では、幼少期からスマートフォンやゲームなどの娯楽に触れる機会も多く、子どもたちの読書離れが進んでいますが、本のおもしろさは時代に左右されない不変のものだと思います。絵本を読むことで、きれいな言葉や人を傷つけない言い方、伝わりやすい言葉などを学ぶことができ、コミュニケーションに役立ちます。私たちが読み聞かせをすることで、本のおもしろさや言葉遣いを知ってもらい、自分からすすんで読書をするきっかけができたらいいなと思いつつ活動を続けています。



いとうみちこ 伊藤満智子さん
たかはしかおり 高橋香織さん
こじまひろこ 児島弘子さん



「図書館おたのしみ会」で読み聞かせボランティアさんたちの話に聞き入る参加者の子どもたち



ゆう 結友ちゃん
(長女)

ともみ 友美さん
(母)

にか 仁夏ちゃん
(次女)



左_本の話をする楽しそうにする結友ちゃんと仁夏ちゃん
右_いつでも読めるように、テレビの横には図書館から借りてきた本を並べて置いてある

作家ごとの想像力に触れる

さくらいともみ 櫻井友美さん

私自身のこれまでの経験の中で本は良いものと考えています。子どもがまだ赤ちゃんの頃は、散歩コースに図書館を入れて館内で読み聞かせをしていました。家でも旅先でも、毎日寝る前にするようにし、9歳と5歳になった今でも習慣付いています。

2人とも本が好きで、図書館には2週間に1度のペースで借りに行きます。多いときはひとり10冊。なかなか自分では買わない紙芝居なども借りられるので楽しいです。イベントにも参加することが多く、自分の絵本を作ったり、見たことがない絵巻物のお話を聞いたり

でき、子どもたちも楽しそうです。

私も本が好きで、小説や哲学、心理学、料理の本など幅広いジャンルの本を読みます。子どもたちにも読みたい本を自由に選んでもらっています。例えば絵本ひとつとっても、無数の色が使われていて、たくさんの個性ある絵があつて、その世界に入り込むことで、作家ごとの違う想像力に触れることができます。大人になって、小説や心理学の本などを読むことができるようになったときには、また違う世界観に触れることができるので、今の読書の経験を生かしてほしいと思います。

本の中に宇宙がある



砂川の本屋さん、いわた書店。包装紙には、お客さんにとってかけがえない1冊になるかもしれないからと、いつも心を込めて販売しようとする思いを表した大切な言葉が印字されています。

「本のなかになにがあるか、字がある。字のなかになにがあるか、宇宙がある。」

父から継いだ本屋

1958年、岩田さんが6歳のときに、両親がのちの「いわた書店」となる「紅屋デパート書籍部」を立ち上げました。子どものころから本が好きだったという岩田さん。「小学校や中学校の図書室にあるおもしろそうな本をあらかじめ読んでみたけどもの足りなくて、店に置いてある本を読んだりしていたなあ」と当時を振り返ります。

函館の高校を卒業後は、札幌で働いていました。

「父親とは折り合いが悪かったし、もともと本屋をやりたいとは思っていなかったけど、父親が体調を崩したことがきっかけで23歳のときに砂川に戻ること

にしました」。

岩田さんが正式に本屋を継いだのは38歳のとき。銀行から借金をして、店舗改装などを行いました。しかし、その途端にバブル崩壊が起き、売上は右肩下がりになってしまいます。

この状況を打開しようと、さまざまな取り組みを行いました。「Windows 95が出てすぐに店のホームページを立ち上げて、世界中の人におもしろい本を紹介するつもりで発信してみたけど、誰も見ていないんだよ(笑)」。ほかに、店内のレイアウトを試行錯誤したり、著名人を講師として招いて講演会を開いたり手を尽くしましたが、依然として経営は厳しい状態が続いていたといいます。



いわた書店 店主

いわた とおる
岩田 徹 さん



たどりついた一対一の関係

そんな中で始めたのが、その人に合った本を探すという『二万円選書』。お客さんには、年齢や家族構成、人生で嬉しかったこと、幸福とは何かなどを字数無制限にアンケートを書いてもらい、人柄や考え方を知ったうえで一万円分の本を選びます。中には、10枚以上も送ってくる方もいるとか。お客さんと一対一の関係になることで、たくさんの本を届けることができるようになったという岩田さん。時間をかけて選んだ本を送ったあとには、お礼の手紙がたくさん届くそうです。

読書で広がる可能性

「今の時代だと、隙間時間にはスマートフォンを見て過ごす人も多いでしょ。でも、そんなときにちょっとずつでもいいから本を読んでほしい。すぐくためになったり、限りある人生で本当にやりたいことが見

つかったりすると思う」と読書の本質について話す岩田さん。ほかの本屋にはあまりなく

ても、岩田さんがもっと多くの人に読んでほしいと思った本はたくさん仕入れ、選書のライオンナップに入れています。「おもしろかったよ」、「教えてくれてありがとう」とお客さんに言ってもらえるだけでなく、作家や編集者が読者の感想をSNSで見えて喜んでくれたり、作家本人から感謝の手紙ももらった。選書の読者同士のコミュニティができたりにするそうです。「それが本屋という仕事のやりがい」と、ほほえみながら話してくれました。

『本のなかにながある、字がある。字のなかにながあるか、宇宙がある』。いわた書店の包装紙にはこんな言葉が書かれています。岩田さんが届ける本は、人と人をつなぎ誰かの人生に影響を与えていました。きっと、どの本にも宇宙のような無限の可能性を広げる力があるのだと思います。

- 1 『1万円選書』で選び終えた本を箱に入れて保管中。これまで延べ2万人を超えるお客さんの選書をしてきた
- 2 ファイルにとして壁一面にズラリと並ぶお客さんのアンケート『選書カルテ』。これまでのほとんどが綴られている
- 3 「あ、それとね、これもおもしろいんだよ!」と、どんどん手に取って楽しそうに本の解説してくれる岩田さん

